The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞和田嘉寿男著『倭姫命世記注釈』
Author(s)	是澤, 範三
Citation	語文. 2002, 78, p. 54-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69002
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

和田嘉寿男著『倭姫命世記注釈』

是澤範三

『倭姫命世記』（以下、世記と略称）は、いわゆる神道五部書の一つであり、中世における伊勢神道の文献を代表するものである。倭姫命は垂仁天皇の娘であり、日本武尊の叔母。豊鋤入姫命のあとをうけ、天照大神の御杖代（神が憑依する依代となるもの）となって大神が鎮座する宮処を覓める「国覓ぎ」の旅に出る。各地で国の名をたずね（古代では帰順をうながす意となる）、社を定めて巡幸し、最終的に伊勢国度遇（度会）の五十鈴川の河上に落ち着く。世記はこのような伊勢神宮誕生の伝承によせて教義を説く。

そもそも中世伊勢神道の思想を考えるにおいて重要なこの文献を、古代文学を専門とする著者が関心を持つようになったきっかけは、「上代文献を読む会」で世記を輪読したことによるという（この会にはすでに『古京遺文注釈』、『風土記逸文注釈』（いずれも、おうふう刊）の成果がある）。さらにそれを個人的に評釈および全訳するまでに至ったのは、世記の文章の部分に古代的な文のありかたをかいま見たからである。著者はいう、「文のそもそもは歌であった。歌のそもそもは、言葉で妖気を退けようとする呪術である」（あとがき）と。世記に見られた祝詞のような繰り返しの多い文章が、その形式として、古代のリズムをともなった謡いを彷彿させたのである。

本書の内容を紹介する。まず、注釈にあたり、内容を五〇の段に分かち各段に題名を付す。【原文】の底本には現存最古の写本である神宮文庫蔵本（応永二十七年写、神宮古典籍影印叢刊8所収・八木書店）を使用する。【訓読文】は底本に付された中世の訓をあえて削除し、古代の訓の復元に努めたとある（例えば「天皇」をスベラキ→スメラミコト、「斎」をイハフ→イツクなど）。これは、世記が古代の書の形（擬態）をとっていることに従ったものであり、一つの方法であろう。なお、底本の訓みを採用したものとして日本思想大系（『中世神道論』岩波書店）があり、室町時代初期のよみを示す。そのほか世記では初めての【口語訳】を付し、適宜古注を参照しながらの【語釈】、最後に【考説】をおく。

世記は、その書写が天武朝に行われたことを示す奥書を有し、古代書を装う。著者が随所に引く『倭姫命世記弁』（吉見幸和、一七三六年）や『太神宮本記帰正鈔』（御巫清直、一八六四年）が精緻な考証で、古代を擬した偽書と世記を厳しく批判するのに対し、偽書であることを前提とした著者の考説は寛容で好意的でさえある。著者はいう、「史実というのは、人の世の視点である。人と神とが未分化の時代を、人の世の視点で律しようとすれば、矛盾も出てくる。それを難ずる近世の学者の姿勢は、実証的、合理的に過ぎるようである」（一五九頁）。こういった見方は、昨今の偽書に対する再評価の気運に乗るものであり、その意味でも誠に時宜を得た出版であったといえよう。

巻末には「『倭姫命世記』について」、「倭姫命の巡行―常世への国覓ぎ―」の二編を載せ、古代と中世における伊勢のイメージをふくらませてくれる。また、「所収文献解題」、参考地図（倭姫命巡幸の道、伊勢神宮とのその周辺）を収める。

（和泉書院、二〇〇〇年十一月刊、二五三頁、七〇〇〇円）

――長榮管理学院外國語文教育中心助理教授――